

銀河鉄道の夜

宮沢賢治



一、午后ごごの授業

「ではみなさんは、そういうふういに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊つるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問とをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちでするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどきまぎしてまっ赤になつてしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」
やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困つたようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元

気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では、よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙なみだがいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなく

カムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋しよさいから
 おお 巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒
 ページ な頁ページいっぱいページに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも
 見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈はずもなかったのに、
 すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后に
 も仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、
 カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カ
 ムパネルラがそれを知って気の毒がつてわざと返事をしなかつ
 たのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラ
 もあわれなような気がするのでした。

先生はまた云いました。

「ですからもしもこの天あまの川がわがほんとうに川だと考えるなら、
 その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂じやりや砂利つぶの粒

にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油しゆの球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光のある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮うかんでいゝるのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲すんでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちようど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えましたが、つて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入つた大きな両面とつの凸とつレズを指しました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつ

ぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄うすいのでわずかの光る粒すなわ即ち星しか見えないのでしよう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく机つくえの蓋ふたをあけたりしめたり本を重ね

たりする音がいつぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立つて礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅すみの桜さくらの木のところを集まっています。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜からすうりを取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ふつてどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝えだにあかりをつけたりいろいろ仕度したくをしているのでした。

家へは帰らずジヨバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジヨバンニは靴くつをぬいで上りますと、突き当りの大きな扉とをあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんたの輪転器がぼたりぼたりとまわり、きれで頭をしぼつたりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居おりました。

ジヨバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルに座すわつた人の所へ行つておじぎをしました。その人はしばらく棚たなをさがしてから、

「これだけ拾つて行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジヨバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函はこをとりだして向うの電燈のたくさんついた、たて

かけてある壁の隅の所へしやがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒あわつぶぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼を拭ぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱はこをもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取つて微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまつ

て小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄にわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると台の下に置いた靴かばんをもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛くちぶえを吹ふきながらパン屋へ寄つてパンの塊かたまりを一つと角砂糖を一袋ふくろ買いますと一目散いちもくさんに走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢いきおいよく帰つて来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱むらさきに紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆ひおおいが下りたままになっていました。

「お母つかさん。いま帰つたよ。工合ぐあい悪くなかつたの。」ジョバンニ

は靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼すずしくてね。わたしははずうつと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄げん関かんを上あつて行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室へやに白しろい巾きんを被かぶつて寝やすんでいたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰つたの。」

「ああ三時ころ帰つたよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだらうか。」

「来なかつたらうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿さらをとつてパンといつしよにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」
「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪い
ことをした筈はずがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ
寄贈きぞうした巨おおきな蟹かにの甲こうらだのとなかいの角だの今だつてみんな
標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわ
る教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で以下数文字分空白
「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといつ
たねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うん
だ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパ
ネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしてい

るよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちょうどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、^{かま}罐がすつかり^{すす}煤けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中ま

「だしいんとしてゐるからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなからすうりで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一いっしょ緒なら心配はないから。」

「ああきつと一緒だよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジョバンニは立つて窓をしめお皿やパンの袋を片附かたづけると勢よく靴をはいて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなきびしい口付ひのききで、檜ひのきのまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どンドン電燈の方へ下りて行きますと、

いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジヨバンニの影かげぼうしは、だんだん濃こく黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ふつたり、ジヨバンニの横の方へまわつて来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配こうばいだから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越こす。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た。）

とジヨバンニが思いながら、大股おおまたにその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新らしいえりの尖とがつたシャツを着て電燈の向う側の暗い小路こうじから出て来て、ひらつとジヨバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジヨバンニがまだそう云つてしまわないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいつていました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠ねずみのようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯あかりや木の枝えだで、すっかりきれいに飾かざられた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼めが、くるつくるつとうごいた

り、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤ガラスばんに載つて星のようにゆつくり循めぐつたり、また向う側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまわつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうつと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形だえんけいのなかにめぐつてあらわれるようになって居おりやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむつたような帯になつてその下の方ではかすかに爆発ばくはつして湯気でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚あしのついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立っていました。いちばんうしろの壁かべには空じゅうの星座をふしぎな獣けものや蛇へびや魚や

瓶びんの形に書いた大きな図がかかっています。ほんとうにこんなような蝸かきそりだの勇士だのそらにぎつしり居るだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立つて居ました。

それから俄にわかにお母さんの牛乳のことを思いだしてジヨバンニはその店をはなれました。そしてきゆうくつな上着の肩かたを気にしながらそれでもわざと胸を張つて大きく手を振つて町を通つて行きました。

空気は澄すみきつて、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なもみや檜ならの枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢山たくさんの豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのです。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの

口笛くちぶえを吹ふいたり、

「ケンタウルス、露つゆをふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本いくほんも幾本も、高く星ぞらに浮うかんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂においのするうすくらしい台所の前に立って、ジョバンニは帽子ぼうしをぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はしいんとして誰たれも居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年老とった女の人が、

どこか工合ぐあいが悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中
で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕ぼく※とこへ来きなかつたので、貰もらいにあがつ
たんです。」ジヨバンニが一生けん命いきおい勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦こすりながら、ジヨバンニを見
おろして云いました。

「おつかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来てください。」その人はもう行つて
しましそうです。

「そうですか。ではありがとう。」ジヨバンニは、お辞儀じぎをして
台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火あかりを持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそつちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまつたように思ったとき、

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続い

て叫びました。ジヨバンニはまつ赤になつて、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまつて少しわらつて、怒おこらないだろうかというようにジヨバンニの方を見ていました。

ジヨバンニは、遁にげるようにその眼を避さけ、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジヨバンニは、なんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でびよんぴよん跳とんで

いた小さな子供らは、ジヨバンニが面白おもくしろてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジヨバンニは黒い丘おかの方へ急ぎました。

五、天氣輪てんきりんの柱

牧場のうしろはゆるい丘になつて、その黒い平らな頂上は、北の大熊星おおぐまぼしの下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジヨバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼつて行きました。まつくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴ

か青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、
ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜からすうりのあかりのよ
うだとも思いました。

そのまつ黒な、松や檜ならの林を越こえると、俄にわかにがらんと空が
ひらけて、天あまの川がわがしらしらと南から北へ亘わたつているのが見え、
また頂いただきの、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそう
か野ぎくかの花が、そこらいちめんに、夢ゆめの中からも薫かおりだし
たというように咲き、鳥が一疋びき、丘の上を鳴き続けながら通つ
て行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするか
らだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗やみの中をまるで海の底のお宮のけしきのようにと
もり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫さけび声もかすかに聞

えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニの汗あせでぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果りんごを剥むいたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ていても、そのそらはひる先生の云ったような、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらあ

る野原のように考えられて仕方なかったのです。そしてジヨバンニは青い琴ことの星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬またたき、脚が何べんも出たり引つ込こんだりして、とうとう蕈きのこのように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまぢまでがやつぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

六、銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になつて、しばらく螢ほたるのように、ぺかぺか消えたりともつたりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃こい鋼青こうせいの

そらの野原にたちました。いま新らしく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原に、まつすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声がしたと思うといきなり眼の前が、ぽつと明るくなつて、まるで億万の螢鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたという工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあつと明るくなつて、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦つてしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。ほん

とうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈の
 ならんだ車室に、窓から外を見ながら座すわつていたのです。車室
 の中は、青い天蚕絨びろうどを張った腰掛こしかけが、まるでがら明きで、向
 うの鼠ねずみいろのワニスを塗った壁かべには、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二
 つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高
 い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。
 そしてそのこどもの肩かたのあたりが、どうも見たことのあるよう
 な気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、
 たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうと
 したとき、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こつちを見まし
 た。

それはカムパネルラだったので。

ジヨバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思つたとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走つたけれども遅おくれてしまつたよ。ザネリもね、ずいぶん走つたけれども追いつかなかつた。」と云いました。

ジヨバンニは、(そうだ、ぼくたちはいま、いつしよにさそつて出掛けたのだ。)とおもいながら、

「どこかで待つていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰つたよ。お父さんが迎むかいにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ぎめて、どこか苦しいというふうでした。するとジヨバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おか

しな気持ちかしてだまってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直つて、いきおい勢よく云いました。

「ああしまった。ぼく、すいとう水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすぎだ。川の遠くを飛んでいたつて、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになつた地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿つて一条の鉄道線路が、南へ南へとたどつて行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまつ黒な盤ばんの上に、一の停車場や三角標さんかくひょう、泉水や森が、青や橙だいだいや緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図

をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」
ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」
「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたらうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指さしました。

「そうだ。おや、あの河原かわらは月夜だろうか。」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすつきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられ
てうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いな

がら、まるでね上りたいくらい愉快ゆかいになつて、足をこつこつ
 鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛くちぶえを吹きな
 がら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きわめよ
 うとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませ
 んでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな
 水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼めの加
 減か、ちらちら紫むらさきいろのこまかな波をたてたり、虹にじのようにぎ
 らつと光つたりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原
 にはあつちにもこつちにも、燐光りんこうの三角標が、うつくしく立っ
 ていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いも
 のは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、
 或あるいは三角形、或あるいは四辺形、あるいは電いなや鎖なすの形、さまざま
 にならんで、野原いっぱい光つていたのでした。ジヨバンニは、

まるでどきどきして、頭をやけに振りまふりました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫ふるえたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来了。」ジヨバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジヨバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

「ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光びこうの中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」

カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい芝草しばくさの中に、月長石つきざいでも刻ま
れたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせよ
うか。」ジヨバンニは胸おどを躍らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次の
りんどうの花が、いっぱいいっぱいに光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんのきいろな底をもつ
たりんどうの花のコップが、湧わくように、雨のように、眼の前
を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ
光って立ったのです。

七、北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、急せきこんで云いいました。

ジヨバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのように見える橙だいだいいろの三角標のあたりにいらつしやつて、いまぼくのことを考えているんだつた。）と思おいながら、ぼんやりしてだまつていました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いつたいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸さいわいなんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだし

たいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」
 ジョバンニはびつくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車にわのなかが、ぱつと白く明るくなりました。見ると、

もうじつに、金剛石こんごうせきや草くさの露つゆやあらゆる立派たてなさをあつめたよう
 な、きらびやかな銀河ぎんがの河床かわどこの上を水は声もなくかたちもなく
 流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光ごこうの射さした一つ
 の島が見えるのでした。その島の平らなただきに、立派な眼
 もさめるような、白い十字架じゅうじかがたつて、それはもう凍こおった北極

の雲で鑄たといったらいいか、すきつとした金いろの円光をい
ただいて、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が始りました。
た。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつす
ぐにきものひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶すいしよ
の珠数じゆずをかけたたり、どの人もつつましく指を組み合せて、そつ
ちに折いっているのです。思わず二人もまつすぐに立ちあがり
ました。カムパネルラの頬ほほは、まるで熟した苹果りんごのあかしのよ
うにうつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行き
ました。

向う岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やっぱり
すすきが風にひるがえるらしく、きつとその銀いろがけむって、

息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火きつねびのように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになってしまひ、またすすきがざわざわ鳴つて、とうとうすっかり見えなくなつてしまいました。ジヨバンニのうしろには、いつから乗つていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼あまさんが、まん円な緑の瞳ひとみを、じつとまつすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝わつて来るのを、虔つしんで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席もどに戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ちをも、何気な

くちがった語ことばで、そつと談はなし合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着あくんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈あかりと、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄いおうのほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面ダイヤルには、青く灼やかれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとつてしましました。

二十分停車と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」 ジョバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫むらさきがかつた電燈が、一つ点ついているばかり、誰も居たりませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽あかぼうらしい人の、影かげもなかったのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏いちょうの木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅はばの広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩かたをならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある室へやの中の、二本の柱の影の

ように、また二つの車輪の輻やのように幾本も幾本も四方へ出るのでした。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原かわらに来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌てのひらにひろげ、指できしきしきさせながら、夢ゆめのように云っているのでした。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習つたろうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫こいしは、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉トパースや、

またくしやくしやの皺曲しゆうきよくをあらわしたのや、また稜かどから霧きりのよ

うな青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニは、走つてその渚なみだに行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその

銀河の水は、水素よりもつとすきとおつていたのです。それ

でもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいつぱいに生えている崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿つて出ているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立つたり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカツと光つたりしました。

「行つてみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そつちの方へ走りました。その白い岩になつた処の入口に、

プリオシン海岸という、瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製

のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖^{とが}つたくるみの実のようなものをはひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山^{たくさん}ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行つて見よう。きつと何か掘つてるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近よつて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻^{いなずま}のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻^{かいがら}でこさえたようなすすきの穂^ほがゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴ながぐつをはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴つるはしをふりあげたり、スコープをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中むちゆうでいろいろ指図さしずをしていました。

「そのその突起とつきを壊こわさないように。スコープを使ったまえ、スコープを。おっと、もう少し遠くから掘つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴らんぼうをするんだ。」

見ると、その白い柔やわらかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣けものの骨が、横たおに倒れて潰つぶれたという風になつて、半分以上掘り出されてきました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄ひづめの二つある足跡あしあとのついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡めがねをきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あつたらう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあところは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿のみでやつてくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔むかしはたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要いるんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証しょうこ拠もいろ

いろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨ろっこつが埋もれてる筈はずじゃないか。」大学士はあわてて走つて行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計うでどけいとをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙いそがしそうに、あちこち歩きまわって監督かんとくをはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りました。そ

してほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝ひざもあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジョバンニは思いました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなつて、間もなく二人は、もとの車室の席に座すわつて、いま行つて来た方を、窓から見ていました。

八、鳥を捕とる人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外がいと套とうを着て、白い巾きれでつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛かけた、赤髯あかひげのせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶あいさつしました。その人は、ひげの中でかすかに微笑わらいながら荷物をゆつくり網あみだ棚だなにのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまつて正面の時計を見していましたら、ずうつと前の方で、硝子ガラスの笛ふえのようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室てんじょうの天井てんじょうを、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲虫かぶとむしがとまつてその影が大きく天井にうつつていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジョバンニやカムパネルラのようにすを見ていました。汽車はも

うだんだん早くなつて、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊ききました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまででも行きませぬ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩けんかのようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵かぎを腰こしに下げた人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。と

ころがその人は別に怒おこつたでもなく、頬ほほをびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁がんです。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴きいてごらんなさい。」

二人は眼めを挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひ

びきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジヨバンニは、どっちでもいいと思ひながら答えました。

「そいつはな、雑作ぞうさない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝こつて、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚あしをこいう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押おえちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてま
さあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審ふしんもありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんとうに鷺さぎだねえ。」二人は思わず叫さけびました。まっ白な、あのさつきの北の十字架じゅうじかのように光る鷺のからだからだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫うきぼりのようにならんでいたのです。

「眼をつぶつてるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞼つぶった眼にさわりました。頭の上の槍やりのような白い毛もちやんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷ふろしきを重ねて、またくるくると包んで紐ひもでくくりました。誰たれがいつたいここらで鷺たなんぞ喰べるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁がんの方が、もつと売れます。雁の方がずつと柄がらがいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになつて、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちようどさつきの鷺のように、くちばしを揃そろえて、少し扁ひらべつたくなつて、ならんでいました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひつぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいに

はなれました。

「どうです。すこしたべてごらん下さい。」鳥捕りは、それを二つにちぎつてわたしました。ジヨバンニは、ちよつと喰べてみて、(なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。)とおもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがり下さい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたたべたかったのですけれども、「ええ、ありがとう。」と云つて遠慮えんりよしましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵かぎをもった人に出しました。

「いや、商売ものを貰もらつちやすみませんな。」その人は、帽子ぼうしをとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥わたどりの景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日おとといの第二限ころなんか、なぜ燈台の灯ひを、規則以外に間一字分空白させるかつて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじゃないかと、渡り鳥どもが、まつ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのところへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方とほうもなく細い大将へやれつて、斯こう云つてやりましたがね、はつは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかり

が射^さして来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、訊こうと思つていたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなければ、砂に三四日うずめなければいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切つたというように、尋^{たず}ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、「そうそう、ここで降りなけあ。」と云いながら、立って荷物をとつたと思うと、もう見えなくなつていました。

「どこへ行つたんだらう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑つて、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光りんこうを出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体きたいだねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおりるといいな。」と云つた途端とたん、がらんとした桔梗ききょういろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいに舞まいおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両

足をかつきり六十度に開いて立つて、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片かたつ端はしから押えて、布の袋ふくろの中に入れるのでした。すると鷺は、蛍ほたるのように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光ったり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなつて、眼をつぶるのです。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天あまの川がわの砂の上うへに降りるものの方が多かったです。それは見ていると、足が砂へつくや否いなや、まるで雪の融とけるように、縮ちぢまつて扁ひらべつたくなつて、間もなく熔よう鋳こうろ炉から出た銅しるの汁じゅうのように、砂や砂利じやりの上うへにひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのでしたが、それも二三度明るくなつたり暗くなつたりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りは二十疋びきばかり、袋に入れてしまふと、急に両手をあ

げて、兵隊が鉄砲弾てっぽうだまにあたって、死ぬときのような形をしまし
 た。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却かえつて、
 「ああせいせいした。どうもからだに恰度ちやうど合うほど稼かせいでいる
 くらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声
 が、ジヨバンニの隣となりにしました。見ると鳥捕りは、もうそこ
 でとつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直してい
 るのでした。

「どうしてあすこから、いつぺんにここへ来たんですか。」ジヨ
 バンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないよ
 うな、おかしな気がして問いました。

「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあな
 た方は、どちらからおいでですか。」

ジヨバンニは、すぐ返事しようと思いましたが、さあ、

ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

九、ジョバンニの切符きつぷ

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなきい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟むねばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼めもさめるような、青宝サファイア玉と黄玉トパーズの大きな二つのすき

とおつた球が、輪になつてしずかにくるくるとまわつていました。黄いろのがだんだん向うへまわつて行つて、青い小さいのがこつちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸とつレンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパースの正面に來ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環わとができました。それがまただんだん横へ外それて、前のレンズの形を逆に繰くり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡ねむっているように、しずかによこたわつたのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。鳥捕とりとりが云

いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶつたせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジヨバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジヨバンニは困つて、もじもじしていましたが、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠ねずみいろの切符を出しました。ジヨバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳たたんだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたら、何か大きな畳たたんだ紙きれにあたりました。こ

それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やつちまへと思つて渡しましたら、車掌はまつすぐに立ち直つて叮寧ていねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだつたと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だいじょうぶだと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時

ころになります。」車掌は紙をジヨバンニに渡して向うへ行きま
した。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというよ
うに急いでのでぞきこみました。ジヨバンニも全く早く見たかつ
たのです。ところがそれはいちめん黒い唐草からくさのような模様の中
に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまつて見ている
と何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。
すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように云い
ました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの
天上へさえ行ける切符だ。天上どこじやない、どこでも勝手に
あるける通行券です。こいつをお持ちになれあ、なるほど、こ
んな不完全な幻想げんそう第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行け

る筈はずでさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなつて答えながらそれを又また畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこつちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき驚わしの停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図みくらとを見較べて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにとりなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。驚さきをつかまえてせいせいいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥

捕りのために、ジヨバンニの持つているものでも食べるもので
 もなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸さいわいにな
 るなら自分がああ光る天の川の河原かわらに立つて百年つづけて立つ
 て鳥をとってやってやってもいいというような気がして、どうしても
 もう黙だまっていられなくなりました。ほんとうにあなたのほしい
 ものは一体何ですか、と訊きこうとして、それではあんまり出し
 抜ぬけだから、どうしようかと考えて振り返ふって見ましたら、そ
 こにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚あみだなの上には白い荷
 物も見えなかつたのです。また窓の外で足をふんばってそらを
 見上げて鷺さぎを捕る支度したくをしているのかと思つて、急いでそつち
 を見ましたが、外はいちめんめんのうつくしい砂子と白いすすきの
 波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖とがつた帽子も見えませ
 でした。

「あの人どこへ行つたろう。」カムパネルラもぼんやりそう云つていました。

「どこへ行つたろう。一体どこでまたあうのだろう。僕はぼくどうしても少しあの人に物を言わなかつたろう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はその人が邪魔じやまなような気がしたんだ。だから僕は大人づらい。」ジヨバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

「何だか苹果りんごの匂においがする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨のいばらの匂もする。」ジヨバンニもそこらを見ましたがやつぱりそれは窓からでも入つて来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はない

とジヨバンニは思いました。

そしたら俄にわかにそこに、つやつやした黒い髪かみの六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけずひどくびっくりしたよ
うな顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。隣とな
には黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹ふ
かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしつかり
ひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろ
にもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛かあいらしい女の子が黒い
外套がいとうを着て青年の腕うでにすがって不思議そうに窓の外を見ている
のでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州
だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天

へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召めされているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いいました。けれどもなぜかまた額ぬかに深く皺しわを刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座すわらせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座すわつて、きちんと両手を組み合あわせました。

「ぼくもおねえさんのところへ行くんだよう。」腰こしか掛けたばかりの男の子は顔を変かへにして燈台看守の向うの席に座すわったばかりの青年に云いいました。青年は何とも云いえず悲かなしそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、い

きなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるので、す。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていていらつしやったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわとこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたりほんとうに待って心配していらつしやるんですから、早く行っておつかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スターをうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見

えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいとこを旅して、じき神さまのそこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたって行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたのですか。どうなすつたのですか。」さっきの燈台看守がやつと少しわかつたように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈しずみましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発たつたのです。私は大学へはいつていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちようど十二日目、今日か昨日きのうのあたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾かたむきもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧きりが非常に深かつたのです。ところがボートは左舷さげんの方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫さけびました。近

くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈いのつて呉くれました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居いて、とても押しおしのける勇氣がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたが前からいる子供らを押しのけようと思いました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりでしよつてぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂きやうき氣のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじつとこらえてまつすぐに立たっているなどとてももう腸はらわたもちぎれるよう

した。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟かくごしてこの人たち二人を抱だいて、浮うかべるだけ浮うかぼうと かたまつて船の沈むのを待っていました。誰たれが投げたかライフ ブイが一つ飛んで来ましたけれども滑すべつてずうつと向うへ行つ てしまいました。私は一生けん命で甲板かんばんの格子こうしになつたところはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく約二字分空白番の声があがりました。たちまちみんないろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄にわかに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦うずに入つたと思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没なくなられました。ええボートはきつと助かつたにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕こいですばやく船からはな

れていましたから。」

そこらから小さないのりの声が聞えジヨバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかかって、たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいつたいどうしたらいいのだろう。）ジヨバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でできごとなら峠の上り

も下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」
燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟きょうだいはもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡ねむっていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔やわらかな靴くつをはいていたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光りんこうの川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈げんとうのようでした。百も千もの大きささままの三角標、その大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおつと青白い霧のよう、そこからか

またはもつと向うからかときどきさまさまの形のぼんやりした
 狼煙のろしのようなものが、かわるがわるきれいな桔梗ききょういろのそらに
 うちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗きれいな風は、
 ばらの匂においでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果りんごはおはじめてでしょう。」向うの
 席の燈台看守がいつか黄金きんと紅くまでうつくしくいろどられた大き
 な苹果を落さないように両手で膝ひざの上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですなあ。ここらではこ
 んな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびつくりしたら
 しく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くし
 たり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は一つとつてジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ちゃん^{ぼっ}がた。いかがですか。おとり下さい。」
ジョバンニは坊ちゃんといわれたのです。こししやくにさわつてだまつていましたがカムパネルラは

「ありがとうございます」と云いました。すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送つてよこしましたのでジョバンニも立ってありがとうと云いました。

燈台看守はやつと両腕^{りょううで}があいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがとうございます。どこでできるのですか。こんな立派な萃果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとり
でいいものができるような約束^{やくそく}になつて居^おります。農業だつ

てそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子たねさえ播まげばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフィック辺のように殻からもないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによつてちがつたわすかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです。」

にわかにも男の子がぼつちり眼をあいて云いました。

「ああぼくいまお母さんの夢ゆめをみていたよ。お母さんがね立派な戸棚とだなや本のあるところに居てね、ぼくの方を見て手をだしてここにここにこわらつたよ。ぼくおつかさん。りんごをひろつてきてあげましょうか云つたら眼がさめちやつた。ああここさつきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうございます。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん。」

姉はわらつて眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰たべるようにもうそれを喰べていました、また折角せつかくむ剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルクぬ抜きのような形になつて床ゆかへ落ちるまでの間にはすうつと、灰いろに光つて蒸発してしまふのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く茂しげつた大きな林が見え、その枝えだには熟してまつ赤に光る円い実がいつぱい、その林のまん中に高い高い

三角標が立つて、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまつてその譜を聞いてみると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまつ白な蠟のような露が太陽の面を擦めて行くように思われました。

「まあ、あの烏。」カムパネルラのとりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になつて

とまつてじつと川の微光びこうを受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に來ました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた約二字分空白番の讚美歌さんびかのふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座すわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジヨバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰たれともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジヨバンニもカムパネルラも一緒いっしょにうたい出したのです。

そして青い橄欖かんらんの森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまひそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗へらされてずうつとかすかになりました。

「あ孔雀くじやくが居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがかおる子に云いいました。

「ええ、三十疋ひきぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞え

たのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジヨバンニは俄かにわに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

川は二つにわかれしました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛ゆるい服を着て赤い帽子ぼうしをかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのです。ジヨバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈はげしく振ふりました。すると空中にぎあつと雨のような音がして何かまっくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸てっぽうだまのように川の向うの方へ

飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい美しい桔梗ききょういろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組いくくみも幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気きょうきのようになりうごかしました。するとぴたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしやあんという潰つぶれたような音が川下の方で起つてそれからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫さけんでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の

群がそらをまつすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬ほほをかがやかせながらそらを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいたいと思いつながらだまつて口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほつと息をしてだまつて席もどへ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引つ込こめて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかなさうに答え

ました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらえてそのまま立つて口笛を吹くちぶえいていました。

（どうして僕はぼくはこんなになしひのだらう。僕はもつとところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをしずめるんだ。）ジョバンニは熱ほてつて痛いあたまを両手で押おさえるようにしてそつちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだらうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談はなしているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた泪なみだでいっぱい

いになり天の川もまるで遠くへ行つたようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖がけの上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがつてだんだん高くなつて行くのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞ほうが赤い毛を吐はいて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいつぱい

日光を吸った金剛石こんごうせきのように露つゆがいつぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが「あれともろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからだだぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子ふりこは風もなくなり汽車もうごかずしずかなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律せんりつが糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽しゅうきょうがくだわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見

ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高たけたかい青年も誰たれもみんなやさしい夢ゆめを見ているのでした。

（こんなしずかないところで僕はどうしてもつと愉快ゆかいになれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といつしよに汽車に乗っているがらまるであんな女の子とばかり談はなしているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子ガラスのような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰たれかとしよりらしい人のいま眼めがさめたという風ではきはき談はなしている声がしました。

「とうもろこしだつて棒で二尺も孔あなをあけておいてそこへ播まかないと生えないんです。」

「そうですね。川まではよほどありましようかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峽谷きょうくになつてゐるんです。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかつたらうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果りんごのような顔いろをしてジョバンニの見る方を見ているのでした。突然とつぜんとうもろこしがなくなつて巨おおきな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧わきそのまつ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕うでと胸にかざり小さな弓に矢を番つがえて

いちもくさん
一目散に汽車を追って来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」
黒服の青年も眼をさましました。ジヨバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追いかけているんでしよう。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。狩りようをするか踊おどるかしてるんですよ。」青年はいまだここに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒たおれるようになりインデアンはぴたつと立ちどまってすばやく弓を空に

ひきました。そこから一羽の鶴つるがふらふらと落ちて来てまた走り出したインデアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立つてわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影かげももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碇がいし子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたとうもろこしの林になつてしまいました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖がけの上を走つていてその谷の底には川がやつぱり幅はばひろく明るく流れていたので。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜けいしやがあるもんですから汽車は決して向うからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう。」さつきの老人らしい声が云いました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじに鉄道
 がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジヨバンニは
 だんだんころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小
 屋の前を通つてその前にしよんぼりひとりの子供が立つてこつ
 ちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんどんどんどん汽車は走つて行きました。室中へやしゅうのひとたちは
 半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛こしかけにしつかりし
 がみついていました。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわら
 いました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほ
 ど激はげしく流れて来たらしくときどきちらちら光つてながれてい
 るのでした。うすあかい河原かわらなでこの花があちこち咲いてい
 ました。汽車はようやく落ち着いたようにゆつくりと走つてい
 ました。

向うとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたつていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジヨバンニがやつとものを云いました。
「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟が書いてあるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじゃないんでしょうか。」女の子が云いました。
「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習かきようをしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらつと光つて柱のように高くはねあがりどおと烈はげしい音がしました。

「発破はっぱだよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりしました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭さけや鱒ますがきらつきらつと白く腹を光らせて空中に抛ほうり出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニはもうはねあがりたくらい気持が軽くなつて云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子はなしが談はなしにつり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかつたねえ。」

ジヨバンニはもうすっかり機嫌きげんが直つて面白おもしろそうにわらつて女の子に答えました。

「あれきつと双子ふたごのお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫さけびました。

右手の低い丘おかの上に小さな水晶すいしよでもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮つて何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聴きいたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したつての。」

「ぼくも知つてらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩けんかしたんだらう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おつかさんお

話なすつたわ、……」

「それから彗星ほうきぼしがギーギーフリーギーフリーて云つて来たねえ。」
「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」
「するとあすこにいま笛ふえを吹ふいて居るんだらうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやつたのよ。」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄にわかに赤くなりました。楊やなぎの木や何かもまつ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のよ
うに赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまつ赤な
火が燃されその黒いけむりは高く桔梗ききょういろのつめたそうな天を
も焦こがしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりにチウムよ

りもうつくしく酔^よつたようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジョバンニが云^いいました。

「蠍^{さそり}の火だな。」カムパネルラが又^{また}地図と首^{くび}つ引きして答えました。

「あら、蠍の火のことならあたし知^しつてるわ。」

「蠍の火つてなんだい。」ジョバンニがききました。

「蠍がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何^{なに}べんもお父^{ちち}さんから聴^きいたわ。」

「蠍つて、虫^{むし}だろう。」

「ええ、蠍は虫^{むし}よ。だけどいい虫^{むし}だわ。」

「蠍^{さそり}いい虫^{むし}じゃないよ。僕^{ぼく}博物館^{はくぶくわん}でアルコール^{あくしゅる}につけてあるの

見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫さされると死ぬつて先生が云つたよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯こう云つたのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝸かがいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですつて。するとある日いたちに見附みつかつて食べられそうになつたんですつて。さそりは一生けん命遁にげて遁にげたけどとうとういたちを押おさえられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺おぼれはじめたのよ。そのときさそりは斯いう云つてお祈いのりしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私わたしがこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてし

まつた。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉くれてやらなかつたろう。そしてたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことみんなの幸さいわいのために私のからだをおつかい下さい。つて云つたというの。そしたらいつか蝸かはじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰おつしやつたわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちようどさそりの形にならんでいるよ。」

ジヨバンニはまつたくその大きな火の向うに三つの三角標がちようどさそりの腕うでのようにこつちに五つの三角標がさそりの

尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまさまの樂の音や草花の匂においのようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのでした。

「ケンタウル露つゆをふらせ。」いきなりいまままで睡ねむっていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマスストーリーのようにまっ青な唐檜とうひかもみの木がたつてその中にはたくさんのたくさんの豆電燈まめでんとうがまるで千の螢ほたるでも集つたようについでいました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。以下原稿一枚？ なし

「ボール投げなら僕ぼく決してはずさない。」

男の子が大威張おおいばりで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度したくをして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようです。

「ここでおりにけあいけないのです。」青年はきちつと口を結ん

で男の子を見おろしながら云いました。

「厭いやだい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一緒にいっしょに乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符きっぷ持つてるんだ。」

「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももつといいとこをこさえなけあいけないつて僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行ってらつしやるしそれに神さまが仰おつしやるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなでなしにほんとうのたった一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつつましく両手を組みました。女の子も

ちようどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜し^おうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川の川のずうつと川下に青や^{だいたい}橙^{だいたい}やもうあらゆる光でちりばめられた十字架^{じゆうじか}がまるで一本の木という風に川の中から立つてかがやきその上には青じろい雲がまるい環^わになつて後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのよ^うにまつすぐに立つてお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜^{うり}に飛びついたときのよ^うなよろこびの声や何とも云いようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえま^した。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果^{りんご}の肉のよ

うな青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞めぐっているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんさんのシグナルや電燈の灯あかりのなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえつて二人に云いました。

「さよなら。」ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒おこつたようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそう

に眼めを大きくしても一度こつちをふりかえつてそれからあとはもうだまって出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄にわかにがらんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹ふき込こみました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えないうちの天の川の水をわたつてひとりの神こうじう々しい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝ガラス子の呼よびこ子は鳴らされ汽車はうごき出しと思もうううちに銀いろの霧きりが川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金きんの円光をもった電気栗鼠りすが可愛かあいい顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一行に付いた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通つて行くときはその小さな豆いろの火はちようど挨拶あいさつでもするようにはかつと消え二人が過ぎて行くときまた点つくのです。

ふりかえつて見るとさっきの十字架はすっかり小さくなつてしまひほんとうにもうそのまま胸にも吊つるされそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚なぎさにまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになつたねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸さいわいのためならば僕のからだなんか百ぺん灼やいてもかまわない。」

「うん。僕だつてそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙なみだがうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしつかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新らしい力が湧わくようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭袋いぶくろだよ。そらの孔あなだよ。」カムパネルラが少しそつちを避さけるようにしながら天の川のひととを指さしまし

た。ジョバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまつくらな孔がどほんとあいてい
るのです。その底がどれほど深いかその奥おくに何があるかいくら
眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛
むのでした。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗やみの中だつてこわくない。きつとみんな
のほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも
僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。
みんな集つてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあ
すこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄にわかに窓の
遠くに見えるきれいな野原を指して叫さけびました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白く

けむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそつちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕うでを組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジヨバンニが斯う云いながらふりかえつて見ましたらそのいままでカムパネルラの座すわつていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかつていました。ジヨバンニはまるで鉄砲丸てつぽうだまのように立ちあがりました。そして誰たれにも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうつつて叫びそれからもう咽のど喉どいっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになつたように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘おかの草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱ほてり頬ほほにはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさつきの通りに下でたくさんの灯を綴つづつてはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたつたいま夢ゆめであるいた天の川もやっぱりさつきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒な南の地平線の上では殊ことにけむったようになってその右には蠍座さそりざの赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変つてもいないようでした。

ジョバンニは一さんに丘を走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。どんどん黒い松まつの林の中を通つてそれからほの

白い牧場の柵をまわつてきつきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰つたらしくさつきなかつた一つの車が何かの樽を二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて一本の牛乳瓶をもつて来てジヨバンニに渡しながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしまいましたね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のでのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になってその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行つた川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいずつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談はなしているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉いっせいにジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい河が見えませんでした。白い服を着た巡査じゆんさも出ていました。

ジヨバンニは橋の袂たもとから飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際みずぎわに沿つてたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜からすうりのあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろに少しずつ流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ州すのようになったところ
に人の集りがくつきりまっ黒に立っていました。ジヨバンニはど
んそつちへ走りました。するとジヨバンニはいきなりさつき
カムパネルラといっしよだったマルソに会いました。マルソが
ジヨバンニに走り寄ってきました。

「ジヨバンニ、カムパネルラが川へはいつたよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押しお
てやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落つ
こつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そし
てザネリを舟の方へ押しよこした。ザネリはカトウにつかまっ
た。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだらう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附みつからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖とがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじつと見つめていたのです。

みんなもじつと河を見ていました。誰たれも一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨おおきく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えました。

ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにかいないというような気がしてしかたなかつたのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目だめです。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよつて博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っていますぼくはカムパネルラといつしよに歩いていたのですと云おうとしましたがもうのどがつまつて何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶あいさつに

来たとも思つたものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたか

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとうございました。」と町ていねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰つていますか。」博士は堅かたく時計を握にぎつたままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大おとといへん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅おくれたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっぱいにうつた

方へじつと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいつぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。

銀河鉄道の夜

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年 6 月 15 日発行

1994（平成 6）年 6 月 5 日 13 刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和 55）年 1 月

入力：中村隆生、野口英司

校正：野口英司

1997 年 10 月 28 日公開

2010 年 11 月 1 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。